



<当会のホームページ>
<http://net.a.la9.jp/ta/>

■ 本会のシンボルマークは、大使同士の情報交換及び、その委嘱者との相互交流を主眼に図案化。4つのモチーフからなり、山（緑色／地方・故郷・自然）と矩形（青色／都会・テクノロジー）と円及び輪（黄、橙／人・情報・ネットワーク）を表現。

HEAD LINE

【1面】全国大会ふるさと大使全国大会2014年開催される
新年おめでとうございます
——全国ふるさと大使連絡会議代表
山口義夫

【2面】全国大会記念講演
「発見力と発信力で地域を元気に！」
—地域の歩き方からみた提言
——ダイヤモンドビッグ社社長 藤岡比佐志
パネル討論
「縮小時代のまちづくりと住民の幸せ」
——ニセコ町長（北海道）片山健也
——荒川区長（東京都）西川太一郎
——宇部市長（山口県）久保田后子
——（司会コーディネーター）平谷英明

【3～4面】パネル討論（続き）

【5面】懇親会の風景
・ご提供いただいた各地の特産品・地酒等の目録
【6面】「音」で発見するふるさとの魅力
・まちの小さな音で情報交流を ——西村昌子
・音を切り口にした市民活動 ——小林田鶴子

【7面】地域づくり徒然 ——平谷英明
・「なみへい通信」 ——川野真理子

【8面】「ふるさと資源研究会」
この1年を振り返って ——本多忠夫
・編集後記他

第19回「ふるさと大使全国大会2014」開催される

去る2014年10月21日、日本プレスセンターにおいて「ふるさと大使全国大会2014」が開催されました。これは毎年恒例となっているビッグイベントですが、今回も130名を超す参加者数でした。山口代表の挨拶では「この全国大会は19回目で2015年は20年目の節目となる」と述べ、この会が「より良いふるさと」のために日ごろから情報交換を図り、ボランティアで地域の発展のために様々な活動をしていることを報告しました。

その後、ダイヤモンドビッグ社社長の藤岡比佐志氏の基調講演がありました。ふるさと再生にあたって海外の観光客をどのように受け入れるのかという新しい視点から地域の資源を見直してみると、今までとは違った課題が浮かび上がるのではないかということが問題提起でした。特に最近注目されているアジアの観光客のニーズについてはこれまで深く分析されませんでしたが、ラーメン、カレー、カニに強いニーズがあるとか、桜や草花の観光、ハイテクの工場やまちに興味があるなど普段私たちが見落としているようなところに関心があることを再発見し、情報を発信していくべきことを問題提起されました。引き続いて、北海道・ニセコ町長の片山健也氏、東京都・荒川区長の西川太一郎氏、山口県・宇部市長の久保田后子氏をパネリストとし、平谷英明氏（帝京大学教授）をコーディネーターとしてパネル討論が行われました。テーマは「縮小時代のまちづくりと住民の幸せ」でした。

その後、恒例のふるさとの情報交流と懇親会が行われ、各地のお国自慢やふるさと産品・イベントの紹介などがあり、華やかな会となりました。



新年おめでとうございます。

全国ふるさと大使連絡会議として平成8年8月8日に発足し、今年で20年目を迎えます。これから展望を開く賑やかな全国大会2015を開催するため、その準備など会員各位のご協力をお願いします。

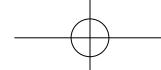
年1回の全国大会（毎年10月下旬）を開催し、新年・夏季の会員交流会（毎年1月及び7月）、その他各地持ち回りで開催する「ふるさとデー」を開催するとともに、その活動状況等を会報「かわら版」（年4回）でお知らせし、東日本大震災罹災地の訪問及びNPO法人に対する資金支援などを実行していました。

当会は全国各地の道府県知事・市町村長等から委嘱された「ふるさと大使」を中心とした集まりですが、本会の趣旨に賛同されるふるさとを愛する個人・法人に開かれた組織です。当会の発展のためにも、新しい会員の推薦をお願いいたします。

本会は全国のふるさと・地域の活性化に貢献するために、全国大会・会員交流会・ふるさとデー等の開催及び会報発行により、各種情報の交換・交流・提携等を行っています。その活動を支える事務局長（甲斐秀治⇒甲斐功一）及びかわら版の編集長（浅田和幸⇒鈴木克也）が昨年交代し、新たな体制で活動に取り組んでいます。今後とも皆様のご協力をお願い致します。

なお、平成27年から常任理事会を毎月開催するとともに、ふるさと資源研究会を開催しています。会員各位が自由に参加していただき、多角的な視点から活動的な「全国ふるさと大使連絡会議」にできればと願っております。どうぞ本年も宜しくお願い申し上げます。

全国ふるさと大使連絡会議代表 山口義夫



全国大会 「発見力と発信力で地域を元気に！ 記念講演 -『地球の歩き方』からみた提言」

ダイヤモンドビッグ社社長 藤岡比佐志 氏



外国人観光客によるふるさと活性化

これからのがふるさと活性化にあたって外国人観光客をどのように受け入れるかは極めて大きな課題であるし、それを考えることによって新しい発見が生まれる。

国では2006年を境に外国人観光客の受け入れを国家戦略とすることを決定したが、これがようやく本格的なものとなりつつある。

2006年には外国人観光客は約800万人で、1兆円マーケットであったが、この人数はフランスの10分の1、マーケットでは5分の1で、いかにも低かった。これが昨年は1000万人を超えた、今年は1300万人になる勢いである。

2020年には2000万人とか3000万人とということになりマーケットとしても3兆円という巨大なものとなる。これは日本の輸出総数の4.5%だが、実際にはもっと高い成長も期待される。これを東京、大阪、名古屋だけを受け止める事はできず、各地位に分散させないといけない。またそうでないと日本の本当の魅力が伝わらないことになってしまう。地域によっては非常に大きなインパクトがあると思われる。

ここで重要なことは外国人観光客のうち70%がアジアの人だということである。フランスでも外国人観光客の多くは近隣の諸国から呼び込んでいる。日本は近隣の東アジア、東南アジア諸国をもっと大切にする必要がある。日本では外国人観光客というと、どうしても欧米人を中心と考えるようだが、これからはアジア人の行動やニーズについてよく知る必要がある。

アジアからの訪問者のニーズ

アジアからの訪問者はこれまで中心だった欧米からの訪問者とニーズが異なる。

例えば、各地域の歴史などにはあまり興味がない。歴史であれば自分たちのほうが長いと思っているのかもしれない。彼らが好むのは食であれば、ラーメン、カレー、丼ものなどである。和食というとかしこまったものを想定しやすいが彼らは違う。これらはれっきとした日本

食であり、経済的でもあり、ボリュームもある。なぜだかカニは特別好きなようである。果物にも大変興味をもち、柿、イチゴ、サクランボなどどれをとっても日本の果物のおいしさは格別であり、彼らは好んで食べている。

風景であればやはり富士山や雪景色である。また広大なお花畠や満開の桜である。日本人であれば当たり前にになっているものに大変感動する。桜などは咲いている期間が短いが、日本は南北に長いので、桜前線というものがあり、今どこが見ごろかという情報をつければ結構喜ばれるはずである。

それから彼らの行動であるが、日本人の好みそうなゆっくり、のんびりではなく、忙しく動き回る方を好む。夜はホテルや旅館でゆっくりしてくださいといでの満足できない。その意味で夜の観光は重要で、これにうまく対応しているところ少ないように思われる。夜楽しめるようなショーやイベントも地方ではありません。居酒屋のようなものでもいいから外国人が気軽に集えるような場が必要である。メニューにあまりこだわる必要がなくセットメニューで十分である。

お土産も包丁やジャーなどが求められているので、我々の考え方自体を考え直す必要がありそうである。

情報の発信

彼らはハイテク商品の多いまちや工場見学のできる工業都市にも興味を持っている。外国人を迎えるにあたっては、こちらで勝手に思い込むのではなく、彼らの事をよく観察し、マーケティングすることが特に重要である。それらの中から新しい発見ができる。そのための情報発信のあり方も変わってくる。スマートフォンやモバイルメディアもよいが、意外と外国人向けのフリーマガジンを発行して旅行代理店に配布するなどは効果的である。いずれにしても、地域の資源を探索しこちらにあって彼らにないようなものを発掘し情報発信していくことが必要である。

パネル討論「縮小時代のまちづくりと住民の幸せ」(要約)

ニセコ町長（北海道）片山健也氏

荒川区長（東京都）西川太一郎氏

宇都市長（山口県）久保田后子氏

(司会・コーディネーター) 平谷英明（帝京大学教授）

(司会) 本日は「縮小時代のまちづくりと住民の幸せ」というテーマで討論をお願いします。少子高齢化は時代の流れで各地域で大きな問題となっていますが、この流れを止めるのはそう簡単ではありません。しかし、地域によっては今の基調講演にもありましたように外国人観

光客によって活性化を図ろうとするものもありますし、住民の幸せという視点からまちづくりを考え直す新しい動きも出ています。その辺について現職の自治体の首長にお話を伺おうというのが趣旨です。まずは各自治体の概略のご紹介をお願いします。



片山ニセコ町長：ニセコ町は、札幌から車で120分、小樽から90分のところにある人口約4800人のまちです。

観光についてはオーストラリアからのスキーパークをはじめ、東南アジアやヨーロッパなどから外国人観光客も増え、外国人宿泊者の延べ人数は38万人にのぼっています。

世界のリゾート地に育てるためには環境保全が大切だと考え、自然再生可能エネルギーの導入、ゴミのリサイクルなどの積極的な取り組みをしています。水道水の原水とし、ミネラルウォーターの水資源を大切にしています。

そして、住民自治を具現化するため情報の完全なオープン化を目指しています。特に子供たちを大切にし、安心して子育てができるまちづくりを進めています。

西川荒川区長：東京都の北東部にある人口約21万人の特別区です。首都直下型の地震が来ると火災など被害が最も大きくなるといわれていますので特に防災には力を入れています。

私は2004年に区長になって以来、「荒川区民の幸せ」が最も重要だと提唱し、そのための施策を行ってきました。その中で2009年には荒川区自治総合研究所を設立し、専門家にも加わっていただいて、荒川区民総幸福度(GAH：グロスアラカワハッピネス)の研究をしています。これは46の指標をつくり、住民アンケートによって具体的に住民の幸福度を測定し、これを行政運営に活かそうというものです。また、住民の幸福実感向上という同じ志を持つ全国約60の基礎自治体に参加いただき、「幸せリーグ」をつくって活動しています。



久保田宇部市長：山口県南西部に位置する瀬戸内海に面した人口約17万1000人のまちです。地方の典型的な工業都市として古くから公害問題を抱えていましたが、産・官・学・民の連携による「宇部方式」と呼ばれる環境対策に成功し、今では「国際的な環境先進都市」といわれるようになりました。

1997年には国連環境計画(UNEP)からグローバル500賞を授与されました。

本市の観光の中心は、四季折々の花に彩られた総合都市公園「ときわ公園」で、「日本の都市公園100選」にも選ばれました。平成27年3月には公園内の動物園もリニューアルオープンし、旭山動物園に負けない魅力あるものにしようとしています。次世代エネルギーパーク化にも取り組んでいます。また、この公園内では半世紀を超える歴史のある野外国際彫刻コンクール「UBEビエンナーレ(現代日本彫刻展)」も開催しています。

さらに6次産業化については、地産地消をベースとし、着地型の産業観光にも積極的に取り組んでいます。
(司会)お聞きいただきましたように、自治体ごとにそれぞれ独自性を持っておられますが、住民の幸せというものをきちんと押さえられているという点では共通していると思われます。その辺りのところをもう少し詳しく

お話し下さい。

久保田宇部市長：宇部市があります山口県は人口が減少しており、宇部市も例外ではありません。それに対抗するためには「総合力」の発揮が重要だと考え、私が市長になってから4年間一生懸命取り組んできました。宇部の場合、工業都市ですから、それを活かした6次産業化に取り組み、産業観光、環境政策、地産地消などを進めています。

また、地域活性化のためにはまず「働く場」を確保することが重要だと考え、外部から企業を誘致するとともに、地元中小企業の振興を図っております。これについては誘致企業数が急増するなど成果が表れており、むしろ人手不足が問題となっています。ただし宇部市の場合はモノづくりが中心で、医療サービス産業はまだこれからです。高齢化に対しましては、医療・介護のサービスをどのように充実していくかが大きな課題です。

もう一つの大きな柱として地域全体での健康づくりを取り組んでいます。健康という個人的な問題とお考えになるかもしれません、地域全体で取り組まなければならない問題もたくさんあります。公害はもちろんですが、介護や予防、食による健康もあげられます。地域交流センターなどを中心に「互助の精神」で健康なまちづくりを推進しております。

もう一つは、これからを担う子供たちの教育問題です。学校や幼稚園のあり方も重要ですが、子供たちの自主性を伸ばす「子供会」の活動を支援しています。



西川荒川区長：荒川区は東京都の中で住民の減らない地域の代表となっています。その秘密は町会です。荒川区の町会への加入率は約65%で東京23区屈指の高さを誇っています。犯罪件数の少なさも23区内トップクラスとなっています。「安全・安心のまちづくり」に力を入れているのです。例えば子供たちの登下校は高齢者の方やボランティアの方などにより見守りを行うなど、地域ぐるみで児童の安全確保を行っています。

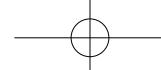
また、文化・教育面では、全国の自治体に先駆けて全小中学校にタブレット端末を本格導入、1人1台体制を確立し、さらに各校に図書館司書を1人以上配置するようにしています。

高齢化に対しては転倒予防対策として「荒川ころばん体操」を実施しています。このようにして、住民の幸福度を高めるための政策として、1000を超える事業を積み重ねてきました。子供から高齢者まで誰もが幸せを感じることができるまちづくりを目指しています。

片山ニセコ町長：ニセコは観光都市として少し知られつつありますが、私どもは農業や環境を重視し、住民自治にもエネルギーを注ぎました。

地域の農業に誇りを持ち地産地消を推進しています。環境面でも、二酸化炭素の排出量の抑制に努めており、物質循環、経済循環により将来は経済的自律を目指しています。

情報の共有化により住民の主体的参加による街づくり



を目指しております。また地方自治法は「最小の経費で最大の効果を」と規定していますが、私は発想を転換して「最大の価値を最小の経費で」に変えなければ自治体の発展はないと思っております。

そして、教育は「子供たちへの投資」と考え、積極的に取り組むべきことだと思っています。

(司会) 各自治体とも住民の自治と自立を目指しておられることがよくわかりました。その中で特に住民の安全・安心を大切にし、住民の幸せを第一に考えるという事があると思います。そのため自治体独自の努力に加えて、各自治体の連携も大切かと思います。自治体の協力関係についてもお話しいただきたいと思います。

西川荒川区長：住民の幸福度を高めるには荒川区だけと考えてできるものではありませんので、各自治体と協力してやりたいということで「幸せリーグ」というものをつくり、北海道から九州まで約60の自治体と連携しています。

これは平成25年6月に発足しましたが、全国の自治体を糾合しようとの意図は全くなく、あくまで地域の住民の幸福度をどうすれば高められるかを考えるための組織です。

専門家の方々に顧問に就任いただきアドバイスをいただきながら、各自治体の首長が集まって政策の互換性を高め、また、実務担当者が会議やメール等も活用しながら、各テーマに分かれて職員間での活発な情報交換や意見交換を行い、住民の幸福実感向上につながる施策を生み出していくます。

久保田宇部市長：そのリーグには参加しておりませんが、お考えについては全く賛成です。私どもは環境自治体ネットワークをつくって自治体の協力体制をはかっています。

それにしても住民の幸せで最も重要なのは健康と安全だと考えています。それは個人だけでは確保できないので、地域全体での健康なまちづくりを目指したいと思っています。宇部市では「健康づくり推進条例」を制定するとともに、今後は官民が協働して、専門家も交えて総合的に取り組むことが重要だと思っています。

片山ニセコ町長：私どもは地域の若い人たち、特に農業後継者が意欲を持って活動することが重要だと考え、特に子供たちの教育に力を入れています。全国大会への参加や海外への修学旅行などは、教育効果が極めて高いと

考えています。医療費の無償化はばらまきではなく、子供たちへの教育投資であり、大人たちが負担するのは当然だと思っています。

(司会) 住民自身の幸せにとって、健康と安全は共通の大きいテーマだということですね。ところで最近大きな動きとなってきた「ふるさと納税」についてはどのようにお考えですか。

片山ニセコ町長：「ふるさと納税は、弱い立場の社会福祉団体やNPOなどへの寄付を弱めるとともに、自治体に寄付をすると特産品などのものが贈られてくるというもの。納税して見返りがあるというのは「納税制度」への信頼を失わせる極めて筋の悪い税制だと考えています。

ニセコ町にふるさと納税していただいた方からも、「町長、感謝状だけですか」という声もいただいています。こうした中でも、少しずつではありますが、お返しを求めない寄付も増えており大変ありがとうございます。しかし、町民の中にも、国の制度がある以上、『お返しとして特産品を出した方が良いのでは』との意見もあり、現行制度の中で、福祉団体などへの寄付を弱体化しないような利活用ができないものかと考えをめぐらせており、とても悩ましいところです。

寄付金から税金を控除するのが所得税ではなく、住民税ということも大変大きな問題であり、自治体間における住民税の奪い合いという実に悲しい制度となっているのが現状です。

西川荒川区長：私は東京23区の特別区長会の代表をさせてもらっている立場からいと、ふるさと納税含め、地方財源の取り合いになりかねないような制度には問題が多いと思っています。現時点でも東京から他の地方自治体に多大な財源が移されています。本来東京のために使うべき財源を他に移すというやり方は共倒れになると思っています。

東京と地方が一緒になって地方再生のことを真剣に考え、取り組むべきだと思っています。

久保田宇部市長：「ふるさと納税」については宇部市は積極的に活用させていただいております。これは地域の特色を出すための一つの手段です。そのインセンティブとして納税してくれた人に、市内の高額当選が6年間続いたことから、宝くじをお礼の品として差し上げる案もあるくらい柔軟に考えています。いずれにしても分をわきまえて節度を持って柔軟に対応しているつもりです。

(司会) 最後にこれから将来に向かって自治体として何を目指していくべきかなどについてお話し下さい。

久保田宇部市長：最近は出生率の減少に歯止めがかかってきたように思いますが、人口の減少に合わせたダウンサイジングについては考えていかねばなりません。その際地域の活力を失わないようにするにはどうしたらよいかが大きな課題です。宇部市の場合はまちのスプロール化が進んでいますが、これからはまちのコンパクト化が大きな課題となっており、ハードとソフトの両面からまちづくりの再構築が必要です。

住民にとって最も重要なのは安全ですから、それを最優先にしながら防災を含めた対策に、一生懸命取り組み

ます。

それを推進するためにも女性が輝き、力を発揮してもらいたいと思っています。私も全国では15名の女性の首長の1人として役割を果たしていきたいと考えております。

西川荒川区長：東京で福島県の产品について風評被害が広がったことがありました。そこでつくづく感じたのは東京はもっとおおらかであるべきだということです。

そもそも地方がなければ東京があり得ないのだから、地方に感謝しながら本気になって地方再生のため協力していくべきだと思っています。ふるさと大使連絡会議の皆様にもぜひよろしくお願ひします。

片山ニセコ町長：ふるさと大使連絡会議の全国大会にお呼びいただき、ありがとうございました。この機会にもう一つ申し上げるとすれば、最近の「大きいことはいいことだ」と考える風潮についてです。平成の大合併により、市町村は従来の3,253から1,718にまで減ってしまいました。その結果、地域の小さな集落は人が減り、島

や半島などの海岸線には人が住まなくなりました。今後の国境警備や国防にも響くのではないかと懸念されます。国家の豊かさを考えると、それぞれの地方が地域の特性を活かしながら自律できる基盤を整備することが肝要で、まさに今効した観点からの「地域創生」が求められているのではないでしょうか。

(司会) 皆様どうもありがとうございました。「縮小時代」と掲げましたが、交流人口を増やす努力をしたり、地域活性化の努力で必ずしもそうでない地域もあるうかと思います。いずれにしましても、最も大切なことは地域住民の幸せで、各自治体による地域活性化の努力だと思います。その場合に各首長の意欲とリーダーシップが大きな役割を果たしているということが分かりました。

その中で安心・安全が重要視されていることが分かりました。

その際、各自治体が自立を図りつつ、お互いに連携して助け合っていくことも重要なだと感じました。本日のシンポジウムはこれで終了します。ありがとうございました。

懇親会の風景



ご提供いただいた各地の特産品・地酒等の目録

提供先	提供特産品
北海道ニセコ町 (商工観光課)	特別純米酒「蔵人衆」720ml×6本
弘前市・岩木山観光協会	リキュール「ひとひら」36本「安寿」12本、リンゴジュース10本
秋田県にかほ市 (商工観光部)	日本酒「飛良泉山廃純米酒「二番」3本
秋田県仙北郡美郷町 (商工観光部)	清酒300ml 24本
山形県酒田市 (商工観光部観光物産課)	地酒12本、果実酒リキュール4本、菓子18個

提供先	提供特産品
長野県箕輪町	リンゴ(ジャムスイート)5kg1箱、梨(南水)5kg1箱、信州そば30本
茨城県大洗町	辛焼酎大洗6本
千葉県四街道市 (環境経済部産業振興課)	せんべいの詰め合わせ
山口県宇都市	宇部蒲鉾、「小野茶」、純米吟醸「雄町」
北九州市、 北九州商工会議所	焼酎「無法松」2本、ワイン「無法松」1本、羊羹「くろがね」10個

音で発見するふるさとの魅力

まちの小さな音で情報交流を

四日市ふるさと大使の会 事務局

西村昌子（音の泉サロン）

祈：一粒の種に託す「言の葉」が次世代の風に乗りますように。

四日市では幼児の養蚕体験をきっかけに、2008年の市制111周年記念市民企画「和文化の伝承」から、語り部音具「伊勢一絃琴」が生まれ、「水琴1円茶会」がスタートしました。

それから6年を経た2014年11月24日（月）、兼古勝史さん（放送大学非常勤講師）を招き、「まちの人みんな博物館」をテーマにデジタルフォト・ストーリーテーリングワークショップを実施しました。

ここにその内容をご紹介して次年度から全国各地の皆様に「まちの小さな音（声）風景」という情報交流の場づくりを提案させていただきます。



「四日市みんなで作る音画句会（おんがくかい）」
一
ーフォト・ストーリーテーリングワークショップ
ー
思い出の街並み
いつも歩いた道
忘れぬ面影
一枚の写真から紡いでいく物語…
あなたにとっての大切な写真をもとに
ふるさとの魅力を伝えてみませんか
それはガイドブックにも教科書にもない
世界でたったひとつの四日市

<参加に必要なもの>

- * 「思い出の」「大切な」「自慢の」「人に伝えたい」…写真
- * 写真にまつわる思い出・エピソード
- * 皆さんの持ち寄った思い出の写真と自作の俳句に音楽を合わせてパソコンで作品作りをします。



音を切り口にした市民活動

四日市ふるさと大使の会顧問

小林田鶴子（共栄大学教育学部教授）

一滴のしずくに市民一人ひとりが耳を澄ますことから、四日市市の「音から環境を考える」活動が1996年にスタートしました。

それから4年後にこのしづくは集まり、今、せせらぎのような小さい流れができつつあります。



この流れを作ったのは、四日市市の地域住民をはじめ、学校教育関係者、生涯学習に携わる方々、そして日本各地の演奏家や研究者などです。そこには「音、音楽」を核にした、年齢、立場や地域を越えたひとびとのコミュニケーションがあります。

また、参加者がお互いの個性を尊重しあって協働の「ものづくり」をする「句ショップ」もしばしば開催されています。例えば2014年5月、9月には伊勢茶の産地として知られる水沢町に、日本サウンドスケープ協会会員の小菅由加里さんを講師に迎え、「茶歌と茶畠の音風景～みんなで作ろう、お茶の歌」が実施されました。第2回目の9月28日はお天気に恵まれ、夏の名残と秋の気配が漂う空気感のなか、心地よい茶畠散策の道中、近くの広場で音楽、歌声、アナウンス、人々の声行き交う車の音…などなど、大変にぎやかな音風景が繰り広げられていたり、様々な虫たちの声が絶え間なく聞こえ、カラスの鳴き声は初秋の空により一層冴え渡って聞こえました。そして時折、ツクツクボーシの鳴き声も。さらには三番茶摘みのブーンという茶刈機の音に、季節によって音風景の移ろいを体感するワークショップでした。

こうしたワークショップの中では、一人ひとりの表現方法は違っていても、その「たのしさ」はみんな持っているということをテーマに、個人の存在を明確にする「自分自身の掘り起こし」について語られることも多くなりました。

この様に「音」の持つ多様な面を活用しながら、表現方法の違ったものが共存し「おと、音楽」を切り口として環境の様相を示す「音地図」づくりも進んでいます。せせらぎが大きな流れとなって大海に出るように、四日市市から生まれた人々のつながりが世界に拡がっていくことを望んでやみません。

地域づくり徒然

今年も、ゆるキャラグランプリが埼玉県羽生市で開催され、群馬県のマスコット・キャラクター「ぐんまちゃん」がグランプリに輝きました。

歴代のグランプリは次の表の通りで、男の子キャラが2、性別不明が3となっています。

年	ゆるキャラ	郷土	性別
2010年	ひこにゃん	彦根市	不明（見た人の感じで）
2011年	くまモン	熊本県	男の子
2012年	バリィさん	今治市	不詳
2013年	さのまる	佐野市	男の子
2014年	ぐんまちゃん	群馬県	不明（緑の帽子の男の子風とリボンの女の子風）

また、今年のベスト10を性別で分類しても、男の子キャラが6、性別不明が4となっています。

■男の子キャラ：④しんじょう君（須崎市—最後に獣が目撃された新庄川から）⑤チャチャ王国のおうじちゃま（宇治商工会議所—宇治茶から）⑥与一くん（太田原市）⑥とち介（栃木市）⑨あゆコロちゃん（厚木市）⑩しちゃ（磐田市—靈犬の悉平太郎伝説から）

■性別不明キャラ：①ぐんまちゃん②ふっかちゃん（深谷市—性別は、時と所で可変）③みきやん（愛媛県）⑦しまねっこ（島根県）

丸数字は順位で、性別不明キャラがベストスリーを占めています。

これらの結果から、男の子キャラの方が有利（あるいは、少なくとも、女の子キャラの方が不利）と言えそうです。

では、何故、男の子キャラの方が有利なのでしょう？

- ・歴史上の人物は、男性の方が多いから（例えば、那須与一からの与一くん）
- ・ゆるキャラは、ピエロ、トリックスターに通じるが、このキャラクターは男性向きだから
- ・女性の投票者には、男の子キャラの方が受けるから——などの理由が思い浮かびますが、如何でしょうか？
- 逆に、圧倒的に女性の主人公が有利なのが、NHKの朝の連ドラで、男性を主人公にした途端に、視聴率が急落します。

	前期	澪つくし	沢口靖子	44.3%
		いちばん	岡野太鼓	33.4%と10.9%（割合で24.6%）のダウン
1995年	前期	春よこい	中田喜子	24.9%
	後期	走らんか	三国一夫	20.5%と4.4%（割合で17.7%）のダウン

と、あまりにも顕著な落差が出たため、爾来、男性が主人公の連ドラは制作されませんでした。

そこで、大きく「ゆるキャラは男の子、朝の連ドラはヒロインが有利」と言えそうです。

しかし、今年、久々に男性が主人公の「マッサン」が放映され、高視聴率をキープしています。もっとも、題名こそ竹鶴政孝さんにちなみ男性名となっていますが、実質的には、スコットランド人の妻リタ（テレビではエリー）とマッサン、二人そろって主人公のように思われます。

ゆるキャラも、今年に限ってみると、ベストスリーは性別不明で男女可変のものでした。

そこで、この2つの事例から、強引に結論に持っていくと、「『市民協働』が今後のまちづくりの主体となっていくように、『男女協働』が、今後受けるキャラクターの主流になっていく」と言える・・・かも知れない。

（高知県観光特使、帝京大学教授 平谷英明）

ゆるキャラは男の子有利？

なみへい 通信 宮城県応援フェア

牡蠣小屋開始します！

フネ(千代田区神田錦町3-21ちよだプラットフォーム内)では、1月から宮城県を応援する牡蠣小屋が始まりました。

キリンビールさんの絆プロジェクトとして宮城県や漁協さんたちと一緒に宮城のブランド牡蠣やほたてをPRします。もちろん、宮城県の日本酒も数種類お出しします。

今回のお話は、なみへいのお客様であり、酒サロンで利き酒女史としてボランティアをしてくださった方が、一昨年から宮城のことでの何かできないかと動いていて、ようやくここまでたどり着いた企画です。

私としては宮城県の応援ももちろんそうですが、むしろ、そんな彼女を応援したいと思っての開催となりました。いつも応援してもらっているお返しです。

絆プロジェクトとしては、キリンさんが昨年に続いて、サンケイビルの前でテントを大きく構えていますが、フネの方は、小さく暖かく、店内での牡蠣小屋です。

皆様、どうぞ、応援てきてください。3月27日まで開催しています。詳細はフネのHP (<http://www.fune5963.com/>) に掲載していますのでご案内しますね。

なみへいの方は昨年もたくさん皆様のお世話をなりまして、本当にありがとうございました！ 私にとりましてはフネオーナーが予想以上に大変で、試練の年でありましたが、今年は

もう少し軌道にのせたいと思っています。

今年もどうぞよろしくお願ひいたします。

なみへいは、12月は津軽半島北端の青森県上磯地域(外ヶ浜町・今別町・蓬田村)の3つの地域を特集しました。この地域には、2016年に新幹線が開通するということで、今から商工会連合会さんが音頭をとり、私と料理長が、なみへい始まって以来初めての現地訪問が実現しました。

人口3000人の今別町には食堂も1つしかないそうです。その食堂のお母さんが、先日偶然見たテレビに出でていました。郷土料理のあづベ汁やじゃっぱ汁、若生昆布のおにぎりの握り方などを教えてくれた方ですが、実は2日の青森県上磯地域交流会にも他のお母さんたちと一緒に来てくださいました。

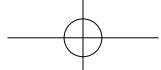
テレビで、アナウンサーが地元の女の子に聞きました。「新幹線が来たら、何が楽しみ？」すると、女の子は「北海道に行けるから楽しみ」と答えていました。

そうだよね、ここに新幹線が止まても、人は泊まらないだろうなーと、ちょっとため息が出ました。上磯頑張れ！

そして、今月のなみへいは、熊本県宇土市と福井県越前町しらやま地区の2地域の特集です。へしこ、和風トマト鍋の他に、おかわかめや菊芋という珍しい野菜が入っていますので、皆様の応援と好奇心を心からお待ちしています。

[\(なみへい&funeフネ オーナー 川野真理子\)](http://www.namihei5963.com/index.shtml)





ふるさと資源研究会 この1年を振り返って

座長 本多忠夫（常任理事）

26年2月に「ふるさと資源研究会」を立ち上げ、12月末までに10回の会合を持ってその活動の方向性を探っていましたが、未だ、結果を出せていません。

当会は、「ふるさと」の為に何か具体的な行動を起こし、少しでもふるさとを元気にしたいとの思いから出発しました。大きく2つの分科会に分け、分科会毎に、テーマを決め、実際に活動していくことにしました。1つはふるさとの「物販分科会」です。他の1つは、ふるさとの「交流分科会」です。

ふるさとを元気にするためには、ふるさとの名産物を多くの人に紹介し、ふるさとにそれなりの利益を得てもらい、元気になってもらう事です。それに、資源研究会と言うからには、ふるさとに埋もれている資源を発掘し、その資源を活かして名産物として製品化し、これを世に知らしめていくことです。「物販分科会」は、そうした面で、2つに分けられます。①既存名産物紹介部会と②（資源発掘）名産物化部会です。

もう一つ、ふるさとを元氣にする為には、ふるさとに行く事です。まずは、首長や、観光協会、商工会の幹部、或いは地元のNPO等民間団体を訪問し、ふるさとが抱えている問題点や課題について意見を伺うことです。そのうえで私たちに何ができるかを提案すると共に、ふるさとの観光資源を私たちの目で発掘し、観光地化や観光ルートを提案するなど、多くの人を当該ふるさとに送り込むための支援活動を行なっています。そうした面で本分科会も、2つに区分されます。①訪問・交流部会と②（資源発掘）観光地化部会です。

この10回の会合を踏まえて、今年は実際に活動を開始していくと考えています。理事は勿論、会員の積極的な参加をあらためて募ります。今年からは毎月第2土曜日の2時から3時半まで開催します。会場は1月は従来通り、秋葉原ダイビル5階・公立はこだて大学東京サテライトですが、2月から会場は変更になると思います。改めて連絡いたします。

ふるさとデー主催者募集

都道府県単位のふるさとをテーマにした交流会「ふるさとデー」の呼び掛け人を募集しています。あなたのふるさとを中心に、ゆかりの方や関心のある人たちが集い、郷土料理やふるさとの話題を楽しむ気軽な集まりです。昨年の夏は久しぶりに「秋田の集い」を開催しましたが、続々開催したいと思います。少人数でも結構です。ぜひ手を挙げてください。

全国ふるさと大使連絡会議の概要

(2015年1月現在)

●設立年月 1996年8月8日

●目的 各地において制度化され、委嘱されている「ふるさと大使」および「委嘱者」相互の情報交換・交流・連携を図り、全国のふるさと・地域の活性化に貢献することを目的とし、その達成のために各種の事業を行うものとする（会則・第2条）

●会員の資格

- ①ふるさと大使
- ②ふるさと大使委嘱団体関係者
- ③ふるさとを愛する人々等

●会 費 所定の会費（3,000円以上、団体会員は10,000円）もしくは相応の貢献寄与をしなければならない

2014年12月末現在の会員構成

大使会員	144名
団体会員	28団体
一般会員	155名
合 計	327名

確認された大使制度

(2015年1月現在)

県知事が委嘱	44団体	83制度
市長村長が委嘱	486団体	543制度
諸団体等の長が委嘱	127団体	124制度
合 計	657団体	755制度

2014年度年会費納入のお願い

当連絡会議は「かわら版」の発行をはじめとする運営管理を会員の皆様の会費で行っております。年会費は個人会員3,000円以上（3,000円以上大歓迎）、団体会員は10,000円ですので、2014年度会費の納入をよろしくお願ひいたします。

*郵便振替（同封の郵便振替用紙）をご利用ください。

00190-7-149658 加入者名：全国ふるさと大使連絡会議

*郵便振込の場合

店名—038 普通 7211051 口座名：全国ふるさと大使連絡会議

*銀行振込の場合は下記へお願いします。

三菱東京UFJ銀行 亀戸支店 普通 0173146

口座名：全国ふるさと大使連絡会議 カイコウイチ

編集後記

今回はふるさと大使全国大会の内容が盛りだくさんです。最近、地域再生が大きな声で呼ばれていますがその内容は従来から言われてきたこととどこが違うのか、そこに具体的な進展があるのかが問われています。当連絡会議はふるさとをよくしたいと思っている仲間の集まりですからこの問題をもっと真剣に議論すべきだと思います。この会も2015年は20回大会を迎えるにあたって大きな節目に差し掛かっています。そのためにもふるさとの情報の収集、ふるさとへの問題提起、情報発信に力を注ぎます。

(鈴木克也)

ふるさと大使かわら版 2015年1月21日—平成27年新春号——（通巻74号）

◇発 行：全国ふるさと大使連絡会議（代表山口義夫）

◇編集責任者：鈴木 克也

◇事務局：〒136-0071 東京都江東区亀戸7-65-20 KUコンサルタント内

TEL03-6802-9270 FAX03-6802-9670

Email : zenkoku@furusato-taishi.jp

URL : <http://net.a.la9.jp/ta/>